様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年６月１５日現在

研究種目：　基盤研究（C）
研究期間：　2006～2008
課題番号：　18520167
研究課題名（和文）　理性と過剰の時代としての「長い十八世紀」におけるユートピア思想の学際的再検討
研究課題名（英文）　An Interdisciplinary Reexamination of Utopian Thoughts in the “Long Eighteenth Century” as an Era of Reason and Excess

研究代表者
川田　潤　（JUN KAWATA）
福島大学・人間発達文化学類・准教授
研究者番号：70323186

研究成果の概要：
本研究では１８世紀前後の時期におけるユートピア思想の見直しを行った。従来、この時期のユートピアは、理性から逸脱した個人や社会への批判という風刺として考えられてきたが、それに対し以下３点の見直しを行った。（１）理性と過剰の役割の再評価（２）多用な要素の混在（３）グローバルな経済状況と「主体」の欲望。このような観点から、従来のユートピア文学だけでなく、顧みられてこなかった作品の（再）検討を行い、この時期のユートピア思想の多様性を確認した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,500,000	0	1,500,000
2007 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	3,300,000	540,000	3,840,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学・英米文学
キーワード：ユートピア、理性、過剰、主体、長い１８世紀、グローバル

１．研究開始当初の背景

研究者は従来からユートピア文学の研究を主に行ってきたが、本研究を開始する直接の背景は以下の２点である。（１）本研究の前の「ユートピア思想の観点からの初期王立協会における文学と科学の相互依存性に関する研究」（若手研究(B)）で、１７世紀後半のユートピア思想について、文学と科学との関連から研究を行ったが、その結果、この時代のユートピア思想が１８世紀に入りどのように変化していったかを考察する必要性を認識することとなった。（２）従来のユートピア研究において、１８世紀はさほど重要視されていない時代で、そこで扱われる作品も限定的であったため、研究をすすめる意義が十二分にあると考えた。

以上２点から、１７世紀との連続性の観点からの１８世紀ユートピア思想の再検討を考えることとなった。また、この１８世紀のユートピアの特質を捉えるためには、１７世紀だけでなく、１９世紀との連続性も考察することで、その変容を確認することができると考えた。そのため、「長い１８世紀」と呼ばれる時代範囲でユートピア思想の研究をすすめることとした。

２．研究の目的

本研究は、いわゆる「長い十八世紀」と呼ばれる時期のユートピア思想を、新たな視座から考察することを目的とした。従来の研究において、多くの場合、十八世紀のユートピア文学は、＜理性の時代＞という図式の中で、「理性」のあり方を論じ、そこから逸脱した状態を批判するための文学形式とみなされてきた。本研究では、このような狭い意味での＜理性中心的な＞ユートピア思想ではなく、これまでほぼ顧みられることがなかった多くの十八世紀のユートピア言説を、イギリス国内に限らず、広く内外の歴史・文化的な状況をふまえた上で、性的な言説、商業的な言説、科学的な言説、政治的な言説との絡み合いから、十七世紀後半に誕生を見たユートピア言説の新たな可能性と、十九世紀後半におけるディストピア文学にいたるまでの、過渡期的存在として位置づけ、その意味作用の豊饒性を考察することを目的とした。

３．研究の方法

本研究は、以下の方法で行った。

（１）長い１８世紀のユートピア文学の発掘、再評価：従来とりあげられてきたテクストを風刺という観点以外から考察し、また、ECCOなどを用いることで、従来、扱われてこなったテクストを蒐集・分類。

（２）ユートピア言説に関する一時資料の蒐集・整理：文学に限定せずに、政治、経済などについて書かれた資料におけるユートピア的言説を蒐集・整理。

（３）ユートピア言説に関する理論的検討：マルクス主義的ユートピア論だけではなく、ジャンル論、リベラル・ユートピア論、帝国論、ヘテロトピア論、ジェンダー論などの観点から、ユートピア理論を再検討。

（４）資料の分析：（１）、（２）の資料を精読するとともに、その全体的な言説の布置（当時の文化の中で、ユートピア言説が、どのような（諸）位置に属しているか）を明らかにする。

（５）多用な批評理論とのすりあわせ：（３）について、他のディコンストラクション、ポストコロニアルなどの文学批評理論、そしてカルチュラル・スタディーズなどとの関係性を考えつつ、新たな視座を明らかにする。

（６）研究のまとめ：（１）～（５）の作業を踏まえて、全体を総括。

４．研究成果

本研究では、いわゆる「長い１８世紀」と呼ばれる時期におけるユートピア思想の再検討を行った。その結果、従来の、理性に基づく逸脱への批判という風刺としてのユートピアの時代という考え方に対して、大きく以下の３点の修正を加えることができたと考えている。

（１）１７世紀との連続性を考えることで、「理性」がいかに文化的に（とりわけ科学思想との関係性の中で）構築されていたかを検証して、それによって、１８世紀のユートピア思想研究における理性重視の傾向を修正し、ユートピア思想が、理性のかたわらにある、非・理性、逸脱の重要性をも示唆していることを明らかにした。

（２）この時期に存在していたユートピア思想の多様性を確認することによって、批判的な「風刺」としてのユートピアではなく、異種混淆的な「諷刺」としてのユートピアの意義を確認するとともに、このような異種混淆のユートピアが、主に１８世紀において形成されていく過程を明らかにし、１８世紀を等閑視してきた従来のユートピア文学研究に修正を加えた。

（３）グローバルな経済状況の萌芽期において、「主体」の欲望の変化とともに、従来の狭い限定的な国家でのユートピア構想だけでなく、多国間の関係性を考えた上でのユートピアが考案され始めたことを確認することで、一国のユートピア（静止的な政体、閉ざされた国家）を重視する従来のユートピア研究に修正を加えた。

以上、三点から見直しを行うことで、従来のユートピア思想に基づくユートピア文学ジャンル形成から排除されてきたテクストを射程に入れることで、１８世紀ユートピアの異種混淆的な性質を確認し、研究発表等でその成果の一部を発表するとともに、現在、その包括的な成果をとりまとめている最中である。

３の研究方法毎にまとめた具体的な作業と、その成果は以下のようになる。

（１）長い１８世紀のユートピア文学の発掘、再評価については主に以下の2点から行って、以下の成果をあげた。

① １７世紀前半に登場したニューアトランテ

ィスものの系譜を、長い１８世紀の範囲で確認をして、そこに当初の科学思想に基づく理性的人間による進歩思想（フランシス・ベーコンによって当初考えられた国家像）だけでなく、宗教、ジェンダー、政治などの多種多様な要素が絡み合うかたちで生成変化していく様子を確認した。とりわけ、デラリヴィエール・マンリーなど女性作家、そしてそれを模倣した男性作家によるエロティックなユートピア群の存在と、その重要性を明らかにした。

②従来のユートピア作品の再評価については、例えば、『ロビンソン・クルーソー』の第１部が人間主体とその内面の問題（プロテスタント的な主体とプランテーションの問題）などを扱っているのに対して、第二部における、過剰なまでの欲望を抱えた、国家を離れた、商人的主体のユートピア的欲望の存在を明らかにし、同様の系譜に属するユートピア的作品を整理した。とりわけ、その際に、異国、それも従来の東洋ではなく、極東（東インド諸島、インド、中国、日本）までも含めたグローバルな空間こそが、新たな主体の欲望を誘発し、それによって、新たなユートピア言説が作り出されていることを示した。

以上のような観点から研究をすすめたことで、ユートピアの系譜について、この時代のユートピア作品における「理性」の文化的構築性と、理性の枠からはずされたものも、ユートピア言説の中で同時に生成され・用いられていることを確認した。

（２）ユートピア言説に関する一時資料の蒐集・整理については、主に以下の3点から行って、以下の成果をあげた。

① 主にECCOを利用することで、国内外とその国民（旅行記、異国描写など）について述べている文献の蒐集を行い、イギリス国内での地方意識、イギリスと大陸との比較、また、中国などの極東をめぐる言説で、国家や主体がどのように位置づけられているかについてまとめ、考察を加えた。それによって、従来の一国家のみの観点からのユートピア思想が、１８世紀においては、複数国家間の国際関係で捉えられる必要性があることを確認した。

②ECCO、LIONなどで科学、経済、政治分野の資料を蒐集した。とりわけ、名誉革命以降、イングランドとスコットランドの合同国家が形成されようとしている時期の宗教と政治の問題、そして、海外貿易における国家の利益とそれぞれの商人の個人的な利益について論じている文献などを検討した。その結果、商業とその利益についての善悪が、政治・経済の問題として前景化するとともに、国家の枠組みの強化とその一方で国家の枠組みとは異なる枠組みを作ろうとする動きがあることを確認した。

③ECCOを利用した一次資料を用い、文学が印刷出版文化の隆盛の中で、法律、商業、植民地主義などの言説を取り込み、表現形式が変化していく過程を検討した。とりわけ、１７世紀後半にその重要性が増してくる、ブックセラーの役割に注目し、商業としての出版が確立していく過程で、テクストのジャンルの混淆状態がいかに登場してくるかについて確認した。

以上のような観点から、この時代のユートピアが、１６世紀にそうであったような、主に国家や政治に関する言説で構成されているものではなく、「科学」「宗教」「グローバルな経済圏」「国際関係」などと密接に関係して構築されていることを確認した。

（３）ユートピア言説に関する理論再検討については、以下の３点から検討を行って、以下の成果をあげた。

① 主にリチャード・ローティのリベラル・ユートピア論の観点からマルクス主義的なユートピア思想を批判的に検討することによって、ユートピア思想の新たな可能性を見いだすことができた。だが一方で、そのローティの「現状肯定的」性格には一定の限界があり、例えば、未来を指向するエルンスト・ブロッホのユートピア論を再評価することで、この両者を止揚する必要性が明らかになった。

② 帝国論の観点からユートピア思想を再検討することによって、１８世紀において、ユートピア思想が国家のグローバルな経済圏での優越性を保証する言説の基盤として機能していたことを確認した。それとともに、帝国の枠内にありながら、国家に縛られない主体の欲望の可能性も同時にユートピア論の中で形成・表象されていく過程を見て取ることができた。

③ 主にヘテロトピア論に依拠して、従来のユートピアが単一的、静的な存在として位置づけられていたのに対して、異種混淆的で動的な存在としてのユートピアの可能性を捉えることが可能であることを明らかにした。また、その際に、エロティシズムなどの個人主体の欲望を、ライヒなどとは異なる観点から、ユートピア思想の中に再挿入できる可能性について考察を加えた。後者については、更なる検討が必要である。

（４）資料の分析については、具体的には、以下の３つの系譜から読み直しを行ない、以下の成果をあげるとともに、今後の課題を確認している。

①科学思想との関わりから、ニューアトランティスとその系譜に属するテクストの読み直しをすることで、従来の科学的・進歩史観というユートピア・国家言説とは異なる、事実と虚構が曖昧になる場、新たな可能性を創出する場としてユートピア言説の意義を明らかにし、さらにその分析をすすめているところである。

②グローバルな経済圏が登場していく中で、『ロビンソン・クルーソー』の系譜に属するユートピアテクスト群を読み直すことで、個人とその集合体（国家ではなく会社など）の欲望としてのユートピア言説の誕生の過程を明らかにした。現在、この言説が、帝国主義的な言説に結びつかないかたちで、継承されていた歴史を検証しているところである。

③『ガリバー旅行記』とその系譜につらなるテクストを、批判的な「風刺的」にではなく、異種混淆的な「諷刺的」にとらえることによって、ヘテロトピアとしてのユートピア言説の存在を確認した。現在は、時代経過ともなう、それぞれの言説間の布置の変化について、分類・整理をすすめているところである。

以上の３つの系譜に加えて、新たなテクスト群から、新たな系譜の存在（例えば、個人の欲望を中心としたユートピアの系譜）を確認しているところである。

（５）多用な批評理論とのすりあわせについては、以下の2点から行い、以下の成果をあげた。

① カルチュラル・スタディーズの観点から、従来のユートピア思想研究が、個別に扱ってきた、人種、ジェンダー、階級の問題を統合的に考える必要を明らかにするとともに、支配・被支配、差別・被差別などの問題について、従来の一元的なユートピア批判（ユートピアは抑圧的でディストピア的にならざるを得ない）に修正を加えて、そのような問題が衝突する場として捉えることの必要性を明らかにした。

②歴史資料と文学テクストの関係を考察する際に、再度、ディコンストラクション的な読みを行うことによって、巧妙で気付かれ難い反映論的な解釈を廃し、ユートピア思想を未だ見ぬ未来を明らかにする思想だとして、新たに考える可能性を明らかにした。具体的には、ユートピアの純粋性、単一性がはらんでいる矛盾と空白を明らかにすることによって、ユートピアのテクストの意味の多様性を明らかにする。そのような作業を通じて、単純に（例えば）ユートピアをイギリス帝国のアレゴリーとして読むのではなく、そこに個人の矛盾した欲望なども読み込むことが可能となる。

（６）研究のまとめについては、以下の成果を挙げるとともに、作業途中、そして次の課題を確認した。

①　上記のように、ニュー・アトランティスの系譜を追うことで、科学思想、宗教、政治、諷刺、エロティシズムを扱うことができる場としてのユートピア言説の可能性の広がりを明らかにしつつ、中国などの異国との出会いをもたらすことになる、グローバルな経済圏での主体の欲望とユートピア思想とのつながりを検討し、さらに、文学市場の形成の問題を考察することによって、さまざまな言説におけるジャンルの混淆が生じていた状況でのユートピア思想の変化とその可能性を検討した。

②　現在すすめているのは、上記の枠組みの中で、今回蒐集した数多くのこれまで扱われてきていないユートピア・テクストがどのように位置するのか、そして、その中で、どのような全体的な力関係が生じているのかを、整理して、明示する作業である。このような作業を行うことによって、従来の１８世紀のユートピア研究の修正点を、個別的にではなく、全体的に、より明らかにできると考えている。

③　次の研究課題として明らかとなったのは、実際に多くの人々が物理的に移動することが可能になる時代となったとき、人間の移動とその心性の変化に焦点を当てることによって、ユートピア思想が主体の想像力と国家の帝国化という観点からどのように変化をするかということである。そのためには、時代をさらに下り「長い１９世紀」を射程に入れる必要がでてきた。これについては、「「長い十九世紀」における人間の移動と想像力の観点からの学際的ユートピア研究」（基盤(C)）で新たに研究を開始したところである。

まとめ

以上述べてきたように、本研究は、風刺としてとらえられてきた「長い十八世紀」のユートピアを、当時のグローバルなネットワー

クが形成されていくなかで、単に一国の政治・経済ではなく、多国間の政治・経済・文化的交渉のなかで、事実と虚構、商業と理念、主体の欲望の創出など、新たな意味を生み出していく場として機能していく過程を明らかにした。とりわけ、商工業に支えられた大英帝国が、科学に基づく新たな主体の登場とともに形成されていく過程とユートピアを想像する過程が、いかに密接に結びついていたかを考える視座を提示できたと考えている。

このような作業を通じて、「長い十八世紀」におけるユートピアを、従来の理想国家像・理性的人間中心の言説空間としてではなく、国家を離れた存在との相互作用によって生み出されていく言説空間としてもとらえることができた。それによって、従来のように、この時期のユートピアを風刺中心のジャンルとみなすのではなく、ジェンダー、人種などのさまざまな他者の要素を組み込み、単純に抑圧するのではなく、そのさまざまな可能性を記述可能にする、想像・創造する実験的な言説空間として形成されていたことを明らかにすることができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

① 川田　潤「カルチュラル・スタディーズの後先」『東北英文学会 Proceedings』 61 回大会号 pp.61-69　2007 年　査読無
②川田　潤「Imagining the Far East」『英語青年』 152.12　p.742　2007 年　査読無
③川田　潤「(An)other Public Sphere(s)」『英語青年』 152.9　p.545　2006 年　査読無
④ 川田　潤「WWW in the Seventeenth Century」『英語青年』 152.6 p.349　2006 年　査読無
⑤川田　潤「Brave Hi(story)」『Shakespeare News』 46.1　pp.6-9　2006 年　査読無
⑥川田　潤「ニューアトランティスのゆくえ」『ジョンソン協会年報』 30　pp.23-28 2006 年　査読無
⑦川田　潤「Gentle and / or Bawdy」『英語青年』 152.3 pp.156-7　2006 年　査読無

〔学会発表〕（計３件）

①川田　潤「彷徨える書籍商」（シンポジアム「近代初期出版文化とイギリス文学　知の流通革命」荒木正純、竹村はるみ、井石哲也、川田潤)」日本英文学会 80 回大会　2008 年 5 月 24 日　広島大学
②川田　潤「(An)other Global Empire: Representations of China in the Eighteenth Century」 American Society for Eighteenth Century Studies　2008　Annual Conference　2008年3月29日　Portland, OR, USA (Hilton Portland)
③川田　潤「極東を夢見る――〈帝国〉と〈異世界＞〉2007 年度大塚英文学会　2007 年 4 月 1 日　筑波大学大塚キャンパス

〔図書〕（計１件）

①エドワード・サイード（翻訳）川田潤、伊藤、斎藤、鈴木、竹森による共訳『収奪のポリティックス』NTT出版　2008年　588pp.

６．研究組織
(1)研究代表者

川田　潤（KAWATA JUN）
福島大学・人間発達文化学類・准教授
研究者番号：70323186

(2)研究分担者

(3)連携研究者